

○國史研究に於ける支那知識の必要

文學博士 黑板 勝美

○樂府の研究

文學士 倉石武四郎

○白蓮教の亂に就いて

文學博士 矢野 仁一

○朝鮮の幢に就いて

文學博士 松本文三郎

○校漢紀書後

傳 增湘

○焉支と祁連

文學博士 藤田 豊八

○崑曲より皮黃調への推移

文學士 青木 正兒

○黑龍江省呼蘭平野の開發に就きて

文學士 有高 巖

○ライブニッツの「支那の最近事」について

文學博士 坂口 昂

○應永外寇の真相

文學博士 三浦 周行

○條支國考

文學博士 白鳥 庫吉

○東洋天文学史大綱

理學博士 新城 新藏

○燉煌本文心雕龍校勘記

文學博士 鈴木 虎雄

○五代宋初に於ける安南の土豪吳氏に就いて

文學士 杉本直治郎

(京都寺町丸太町弘文堂發行、價八、五〇圓)(以上那波)

● Von Bismarck zum Weltkrieg. von Erich Brandenburg. (Berlin, 1924)

ほゞ同時代を取扱へる著述としては、V. Valentin 博士の „Deutschlands Aussenpolitik von Bismarcks Abgang bis zum Ende des Weltkriegs“ あるも、本著は、獨逸外務省の凡ての文書を利用して書かれた最初の著述である點に於て注目さるべきものである。而してこの著の取扱へる時代に相當する、已述の Die Grosse Politik に対照せしむれば甚はだ興味を感じる譯である。獨逸外務省公文書より直接に書かれたこと云ふ事は、本著の最大特色であると同時に、之に固有な短所を伴つて居る。即ち、獨逸文書以外の他國文書を毫も採用せなかつた事は大なる缺點とすべきである。併し、著者が獨逸側の史料のみを取扱ひながら、嚴正なる歴史家の立場を失はなかつた事は誠に賞讃に値すべく、且本著によつて從來曖昧であつた事件にして明白にされたものが多々ある。

三國同盟、三國協定の成立によつて “Spenda isolati-

o” に不安を感じ來つた英國が、一八九八年以後の三年

間に三度も獨逸に親善を求め來つたに對し、種々の事情によつて獨逸がこれを拒絶し、遂に英獨相提携するの好機を永久に失ひ英國をして三國協商側に走らしめし事、一九〇五年の Jingo 事件は、これ決してカイゼルの本心より出たものに非ず、Holstein Putlow の煽動によるものである事、一九〇八年に於る墺匈國のボスニヤ、ヘルゼゴビナ兩州合併に際せる墺匈國の不信的態度に對するカイゼルの憤怒なきが明確且興味的に敘述されて居る。著者はその決論として、獨逸の外交政策は、その先見なきこと、動搖常なかりしことによつて、拙劣なるものではあつたが、如何なる場合に於ても獨逸は戰を欲せし事なし、大戰の責任は佛國のポアンカレ、時の駐佛露國大使 Izvolski の肩にかゝるとして居る。

●Germany. By G. P. Gooch (London, 1925)

本著は、かなり久しく政界に身を投じて居て最近再びオックスフォードに戻つた Fisher 教授の編纂の下に發刊された "The Modern World" なるシリーズの中の一部である。

グーチ教授が、ウエストフアリア條約を起點として大戰勃發に至る獨逸史を僅か百十頁を以て描いて居る才幹に對しては何人も嘆賞せざるを得ない。かくの如き事は到底グーチ教授を措いては何人も爲し得ざる所であらう。

併し、本著が餘りに簡述されて居る爲に、豫め獨逸史の一般知識を持たない讀者にミつては、本著の解釋はかなり困難なるものであらう。本著の最も勝れた個所は、大戰前の歐洲に對する獨逸國民の態度及び戰後の革命を取扱つて居る所である。その論議誠に明確にして公平である。大戰責任論に關しては、著者は持に言ふ所なきもその意見甚はだ温和にして、必ずしも獨逸に凡ての責任を負はしめんさはず、たゞ獨逸の外交、國民の精神状態が大戰勃發の導火線として多大の力を致したミ主張して居るのみである。戰後の獨逸に關しては、佛國のポアンカレの強硬政策を著者は大いに非難し、これ戰後獨逸の統一の最大障礙となつたものであるとして居る。要するに、本著が近代獨逸に關する著述中に於て最も勝れ

しもの、一つである事を、私は断言して憚らない。

●Roosevelt and the Russo—Japanese War.

By Tyler Dennett. (New York, 1925)

本書は、ルーズヴェルトの未刊行書簡を主要なる史料としたものである。而して著者は、ルーズヴェルトの對日露戦役政策に關する從來の知識に多大の新見解を加へて居る。殊に彼がその友人に宛てし書簡によつて、彼が日露戦役勃發に際し若し獨佛兩國が露國に味方して一八九四年の三國干涉の如き行動に再び出でんとする場合には米國は日本に味方してその最善を盡すべしとの意志を有して居た事が明かされて居るが、これは、ルーズヴェルトの親日感情を示す點に於ては多大の興味を惹くべきものである。併し、彼のかゝる思考は、當時の歐洲國際關係より見て無意義なるものこそなければならぬ。

即ち、日露兩國戦は、英國は一九〇二年の同盟によつて日本を助ぐべく、その場合に、ピスマルクの建てた國際外交網を破壊せし第一人者 Delcassé によつて支配する佛國が英國と事を構へてまで露國を助ける筈なく、獨

逸に於ても露國の野心満足の後援をせんとの意志なき事によつて、獨佛兩國が露國を援助するに云ふ事は有り得べからざるものであつたからである。これは、三國干涉の時代と日露戦争の時代との歐洲國際關係の變化を一瞥すれば明かなる所である。

著者の敘述は、後半に於てや、誇張的傾向を持つて來たが、大體に於てその穩當である事を認める。併し、この著述の缺點は、米國の歐洲諸國に對する關係に就ては遺憾なる點多き事である。獨逸に關しての議論が多く正確を得ないのは、これを證して餘あるものである。本書のために謀らば、Die Grosse Politik 中にある極東に關する豊富なる史料、Krause Archiv 中にあるポーツマウス條約に關する新史料等を更に利用すべきであつたらう。

●The European Powers and the Near

East, 1875-1908, By Mason W. Tyler.

(Minneapolis, 1925)

著者は、ミネソタ大學の史學助教授たりし人で今は故

人である。本書は未完成のもので、第一章より第九章までが同教授の筆に成り、後の二章はコロンビア大學の、Carle 教授並びにミネッタ大學の Davis 教授の筆に成るものである。従来、歐洲大戦前の國際外交の中心問題たる近東問題に關しては、多數の著書あり、殊に M. Choubrier の *La question d'Orient depuis le traité de Berlin* や E. Dhaut の *La question d'Orient depuis ses origines jusqu'à nos jours* の如きが權威的著述とすべしとあるが、今亦この著を加へたるは喜ばしき事である。

本書の優秀なる個所は、近東問題を概論せる最初の四章であつて、その叙述簡なりし雖もその論議頗る優秀である。併し、後半に至つては、非難あるべき點がかなりに多い。かの Die Grosse Politik 及び一九二一年に公表された Corti の Alexander von Battenberg を全く利用せず、一八七九年の獨逸同盟に關する權威書となれる Wertheimer の Graf Julius Andrassy をも充分に利用せなかつたのは遺憾である。その結果、著者の論議は常に推量を以て支配され甚だ明瞭を缺く事となつた。且本書に

は誤謬多い事も亦一缺點である。アール教授の筆に成る第十章のバグダッド鐵道問題は、獨逸の史料を深く研究せし點に於て大いに讀むべきものあり、要するに、本書は學術的研究書としては決して上々のものであると云ひ得ないが、近東問題を總體的に把握せんとするものにしては便利なる著述と云はなければならぬ。

● The World after the Peace Conference,  
being an Epilogue to the "History of  
the Peace Conference of Paris" and a  
Prologue to the, Survey of  
International Affairs, 1920—1923." By  
Arnold J. Toynbee. (London, 1925)  
Survey of International Affairs, 1920—1923.  
By Arnold Toynbee. (London, 1925)

歐洲大戦以後の國際事情を明確に了解せんとするは、單に歴史家のみならず一般知識階級の熱烈なる希望である。この點に於て本書の發刊は極めて有意義なるものである。本書は、かの Temperley 氏の名著 "History of Peace Conference of Paris" の續編とも見るべきもので

あつて、各れも British Institut of International Affairs の發刊になるものである。

本著は、多く公文書を基礎とし、その敘述充分に詳細にして、しかも讀者をして根本事情を曖昧ならしむる程複雑ならず、よくその中庸を得、公平を旨として全く黨派的國民的感情より超越して居る。しかも著者は、史學の造詣深き上に、文學的才能に勝れ、外交、旅行に多大の實際的經驗を有する人なれば、本著が甚だ優秀なるものである事は言をまたない。

前著に於て著者は、國際關係の見地に立つて、一九一四年と一九二〇年との世界を比較して居る。即ち、大戰前に於ては、經濟上軍事上、歐洲が國際關係の中心であつたが、大戰による疲弊は、歐洲列強の "hegemony of concert" を破壊せしめ、歐洲は半ば放棄され大陸になつてしまつたこの悲觀的結論を與へて居る。

後著に於ては、前著に於る結論を適用して最近の國際關係を論述して居る。國際聯盟會議の如き、最近生れ出した國際的權威に關して略述した後、世界を、西歐、東歐

回教世界、熱帶アフリカ、極東及太平洋の五部に分ち、この區分に從つて、最近の國際事情を敘述して居る。完全なるビブリオグラヒーを附し、重要な條約、豊富な地圖の附加に相まつて、讀者の了解を容易ならしめて居る。要するに本著は、最近國際關係史に於る模範的良著なりとすべく、しかも今後、毎年續刊さるゝ豫定である事は、吾人の大なる喜悅を感じる所である。(以上大村)

#### ● 歐米過去より現代へ

文學博士 三浦 周行著

本書は著者三浦博士の歐米見聞記であつて、博士は大正十一年の春より年の暮にかけて、大戰後、動搖の尙ほ熾まぬ歐米の地を巡りて、其専門の史學の立場より、彼の歴史學研究、諸種教化機關、其他國家社會の奥底に潛流してゐる戦後の氣運を觀察し、歸來後筆を執り、一部、雜誌に發表したものを合せ編したものでこれである。一年に満たざる巡遊とは言へ、諸種の方面に觀察を向け而も一般旅行記の類と其趣を異にするのは、博士の學問